

草原がつなぐ人・自然・文化

# 全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol.47 (Jul. 2021)



ハナシノブを訪れたヒメシロチョウ（熊本県阿蘇郡高森町／高橋佳孝氏提供）

## 全国草原サミット・シンポジウムについて

### 全国草原サミット・シンポジウムの準備状況

(東伊豆町)

ニュースレター vol.46 でお知らせしました、令和3年9月26日(日)～27日(月)に開催される全国草原サミット・シンポジウム in 東伊豆大会に向け、6月3日(木)に久しぶりに実行委員会が開催されました。地元の委員さんには東伊豆町役場に集まってお話し、町外の委員さんにはオンラインで会議に参加していただきました。この実行委員会を開催するにあたり、高橋先生をはじめ様々な方にご相談にのっていただきました。誠にありがとうございました。また、分科会のサテライト会場として、阿蘇、蒜山、生石高原が手を挙げてくださいました。今後、分科会が有意義なものとなるよう、各会場担当者と打合せをしていく予定です。

開催方法については、基本的にWEBを中心に検討していきますので、これまでと違った大会になるかと思いますが、「草原の持つ公益的な役割や価値について広く国民にアピールするとともに、全国各地で取り組まれている草原活動の現状と課題に関して議論を深めながら、草原保全に取り組む全国の自治体や草原の担い手、NPO 法人等の共通認識を醸成し、



今後の活動に向けて連携と交流を図る」という目的を達成できるよう努めてまいります。

今後、各部門の詳細についても関係者や実行委員会と協議を重ねていき決定していくこととなりますので、皆様のご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

#### ◎現時点でのスケジュール (案)

【1日目】9月26日(日)		【2日目】9月27日(月)	
9:00	草原シンポジウム 開会 ・基調講演(白川勝信氏) ・パネルディスカッション	9:00	現地見学会(細野高原)
13:00	分科会(各地で実施) 全体会(分科会報告)	13:00	全国草原サミット ・前回サミットの報告 (串間市・川南町) ・シンポジウムからの報告、 問題提起
17:00	草原シンポジウム 閉会	17:00	・各自治体の取組と課題 ・草原100選について ・サミット宣言採択 全国草原サミット 閉会

※WEB配信予定(基調講演、パネルディスカッション、分科会報告、現地見学会)

## 各地からの報告

### 寒風山の山焼き再開について

(青木 満：寒風山山焼き実行委員会会長)

#### 1. 寒風山とは

南北に細長い秋田県の中央部で日本海に突き出ている男鹿半島は古くから風向明媚な場所として知られ、昭和 48 年には男鹿国定公園に指定されている。また、最近では特異な地形・地質が評価され日本ジオパークにも認定された。その付け根部分に位置するのが標高 355m の寒風山である。規模は小さいものの、3 万年以上前から活動を開始したとされるれっきとした火山で、三カ所の火口と溶岩流や溶岩堤防などの特徴的な地形が見られることから、火山のミニ博物館とも称されている。



寒風山のオキナグサ

#### 2. 寒風山の半自然草原

寒風山一帯の原植生は冷温帯性の落葉広葉樹林と考えられるが、古くから山麓部の集落の採草地などとして利用されてきたことから、ほぼ全山がススキやシバ草原に覆われていた。このススキ草原などの維持を目的として、昭和 40 年代までは春先に集落単位で山焼きを行っていた。知り合いの古老の話では、寒風山に山焼きの煙が上ると田植えの準備を始めたものだとのことで、地域の風物詩となっていたことがうかがえる。

1960 年代に始まった高度経済成長期以降、農村部では牛馬の農耕利用から耕運機・トラクターの利用への転換や化学肥料の使用拡大が急速に進み、牛馬の使役・飼養が大幅に減少し、飼料・肥料資源としての草原の価値が消失、必然的に山麓部集落による草原維持を目的とした山焼きも徐々に行われなくな

った。

このため、山麓部一帯では草原からコナラやカスミザクラなどからなる二次林への遷移とスギ造林地への転換が進み、草原面積が大幅に減少している。岐阜大学の流域圏科学研究センターによると、1975 年の 430ha から 2012 年には 135ha へと概ね 7 割近く減少したとされている。このような状況ではあるが、山頂部一帯は、国定公園の指定理由の一つでもある草原景観の維持を図るため、県や男鹿市による草刈が継続的に実施され、半自然草原として何とか維持されてきた。

しかしながら、広大な草原を刈り払いだけで維持することは難しく、シバ草地が減少しススキ草地へと変化しただけでなく、ササ（クマイザサ）原、さらにはタニウツギなどからなる低木林への遷移が現在でも進行している。実は、この草原の維持に一定



寒風山の火入れ風景

(2021 年 4 月 24 日、男鹿市提供)



寒風山の火入れ風景

(2021 年 4 月 24 日、男鹿市提供)

の効果を発揮していたのが度々発生した山火事である。特に、2001年に発生した山火事は規模も大きく、火入れが草原の維持に有効であることを関係者が認識し、地元による山焼きの再開活動へとつながる契機の一つとなった。

なお、寒風山の半自然草原は、国や県で絶滅危惧種に選定しているオキナグサやスズラン、メガルガヤなどの半自然草原性植物や草原性の昆虫類などの県内最大規模の生育・生息地となっており、半自然草原生態系の保全上極めて重要な位置を占めるとともに、生物多様性保全上のホットスポット的な存在ともなっている。

また、山頂部一帯の 8 割ほどは、国の特定民有地買上制度などを活用し昭和 52 年度から 58 年度にかけて約 6.8 億円で取得した県有地である。



寒風山の山焼きの全景（2021 年 4 月 24 日）



寒風山の山焼きの近景（2021 年 4 月 24 日）

### 3. 山焼きの再開

#### (1) 第一期山焼き実行委員会活動

上記の山火事を契機として、山焼きの再開機運が盛り上がり、男鹿市が中心となった実行委員会が 2002 年 11 月に組織され、2003 年の 4 月に通称大噴火口一帯の 51ha において 350 人ほどの参加を得て山焼きがほぼ 20 年ぶりに再開された。翌年には、3 月下旬に山頂部南側において 400 人体制で 21ha の山焼きを実施している。また、再開前の 2 年わたり、その下準備として、低木林化が進んだ箇所の刈り払いやスギ植栽木等の伐採作業を県で実施している。

しかしながら、3 月下旬から 4 月上旬に山焼きを計画していたことから積雪や降雪、強風などの影響で、その後の 11 年間で 2008 年と 2014 年の 2 回しか実施できなかった。

このため男鹿市は、山焼きが中止となった場合の防火帯の刈払費や貯水タンクの設置費などが無駄になることから 2015 年度限りで山焼きを中止し、その予算を草刈費用に転用する方針に転換し、現在も刈払いを計画的に実施している。

#### (2) 第二期山焼き実行委員会活動

岐阜大学流域圏科学研究センターの津田先生は、山焼き再開後の 2004 年度から寒風山で長期にわたり研究を継続しており、山焼きが植生に及ぼす影響等に関する多くの成果を有していた。そのさらなる深化を図るため、山焼き中止後の 2017 年 4 月から寒風山大噴火口内の県有地の一部(17 年度;0.3ha、18 年度;0.5ha)で小規模な火入れ実験をボランティアの協力のもと実施していた。もっとも 2018 年の実験では、隣接する斜面 3.6ha あまりを延焼させるという事態を招いた点は反省材料である。

県外の研究者がそのようなリスクを冒してまで故郷の誇りである草原景観の維持のために山焼きを実施していたことが大きな刺激となり、男鹿市長や山麓の町内会、寒風山関連事業者を中心に山焼きを再開させようとの動きを再び呼び込んだ。早々 2018 年 11 月には市の主催で「寒風山の山焼きを考える講演会」を開催し、70 人ほどの市民の参加を得ている。その直後の 2019 年 1 月には第二期の「寒風山山焼き実行委員会」が組織され、春先から山焼きの再開を行うことを決定した。

第二期の実行委員会では、山焼き実施方法を見直

し、気候が比較的安定する4月中旬にするとともに、場所を風が穏やかな大噴火口内の平坦地で実施している。また、参加者は山焼き作業の主力となる消防団を含め基本的にはボランティア参加を原則とした。

新たな取り組みとして、山焼き前に行う防火帯作りにもボランティアの募集を行うこととし、男鹿市内外から多くの市民が参加している。山焼き当日は、一般参加の市民には主に消火活動を担ってもらい、より危険を伴う点火作業などは地元の消防団が中心となって実施している。

第二期活動の初年度となった2019年の実績は、山焼き実施面積12ha、参加人員200名あまりである。準備作業の防火帯の草刈、草寄せボランティアも午前・午後あわせて延べ100名あまりが参加した。2年目となった2020年の山焼き作業は、前々日にコロナ禍による緊急事態宣言の発令により当日が絶好のコンディションにも関わらず残念ながら中止せざるをえなかったが、事前の防火帯作りには84名のボランティアが参加している。

3年目となった今年度の山焼きは、強風により1週間延期され、4月24日に179名の参加者をえて12haあまりの区域を計画どおり完了させることができた。

#### 4. 課題と今後の取り組み

半島部の独立峰である寒風山は、地理的条件から

か実施時期を4月中旬に延伸させたとはいえ季節的に強風条件下にあることは否めず、安定的に山焼きを実施できるかは運まかせの要素が強い。また、各施設の安全確保や参加者数の限界などの理由から、山焼き面積の拡大には限度があり、現実的には今後とも草刈との併存を図っていかざるをえない。

一方、草原の維持を図るためには、枝葉などの有機質分が燃料として消費される山焼きがもっとも有効であることは、山焼実施地や山火事跡地の植生が雄弁に物語っている。

したがって、今後、質の高い半自然草原植生域の拡大を図るため、どの程度山焼き実施面積の拡大が可能なのか関係者で再検討する必要がある。また、様々な媒体を通じた啓発活動の強化を図るとともに、今年から実施している山焼きと自然観察会を組み合わせたイベントなどの充実を図り、本活動への理解者を増やしひいては参加者を増大に結びつけることも重要である。さらに、消防団以外の参加者の山焼き技術の向上を図ることや、市が実施している大噴火口一帯などでの草刈と山焼きとの連動性を高めることも必要であろう。

このような認識を関係者一同が共有し、山焼きを再び地域の新たな風物詩とすることにより、北東北を代表する半自然草原の生態系の保全と、先人たちが営々と築き上げてきた故郷の優れた草原景観の維持を図りたいものである。



寒風山の山焼き跡地の遠景（5月中旬）



寒風山の山焼き跡地のワラビ群落

## グリーンストックでの今後の阿蘇あか牛畜産振興へ向けた取り組みについて (山内康二：(公財)阿蘇グリーンストック)

阿蘇草原再生協議会では、阿蘇の草原維持管理になくてはならない阿蘇のあか牛畜産の振興を支援しようと、これ迄(2011年から)阿蘇草原再生募金で新規の繁殖用雌牛導入への助成事業に取り組んできました。

しかし、近年のあか牛肉の高騰にも関わらず、あか牛畜産農家の減少傾向が続いており、募金委員会でこうした阿蘇のあか牛畜産の現状と課題等について総合的な調査をし、対策を立てる必要があると言うことになりました。そこで、昨年(2022)の8月に「阿蘇あか牛畜産振興検討プロジェクト」が設置され、その後8ヶ月をかけて43件の関係機関や畜産農家のヒアリングを行うと共に、6名の有識者による検討を経て、阿蘇あか牛畜産の現状と課題を大きく以下の通りまとめられました。

### 1. 現状について

(1) 国産の牛全体が不足してきており、特に最近の阿蘇あか牛肉の品薄は非常に厳しいものがあり、そのため価格もかなり高騰してきている。

(2) これ迄の阿蘇の繁殖あか牛生産者は高齢者が多く、あか牛生産者の減少は後継者のいない繁殖生産者の高齢化による廃業が主な要因である。

(3) 一方、全くゼロからの畜産農家への新規就農は、施設や親牛の購入などの初期投資が大きく、又資金の回収(収入が得られる)が相当長期になるためハードルが高く非常に厳しい。

### 2. 今後の対策について

(1) 関係する機関と連携し、阿蘇郡市におけるあか牛畜産新規就農者向けの総合的な相談窓口を立ち上げる。

これ迄、熊本県などでも農業全般に関わる新規就農者支援窓口は設置されてきているものの、畜産農家との連携不足や情報不足でありあまり有効に機能してきていない。こうした点をどう克服出来るのか、又初期の親牛購入資金をどう支援出来るか等が重要であると思われる。

(2) 畜協阿蘇市所管内における地域内一貫生産システム<sup>注)</sup>の構築とあか牛肉直売所の開設

畜協南阿蘇支所管内では、すでに繁殖農家と肥育



農家が連携した地域内一貫生産システムが作られており、約25年以上も続いてきています。又そうした地域内一貫生産システムによって肉質も安定・向上し「あか牛の館」という特別な直売所も年間150頭以上のあか牛肉を販売し成功してきています。

こうした畜協南阿蘇支所に於ける成功事例を手本に、畜協阿蘇市所管内に於いても地域内一貫生産システムの構築とあか牛肉直売所を開設し、現在のあか牛畜産農家と新規就農のあか牛畜産農家を後押ししていく。

以上の「あか牛畜産振興検討プロジェクト」のまとめを受けて、現在阿蘇では今後の対策についての具体化の取組みが始まりつつあります。

一つ目は、若手の新規就農者支援体制作りの準備です。

この問題については、すでにプロジェクトでのヒアリング調査及び協議の中で、県や畜産連合会、有力な畜産農家の方々とは基本的な方向性では了解頂いてきており、協議会等での承認を受けて具体化に入るべき段階にきています。

二つ目は、現在グリーンストック及び(株)GSコーポレーションに於いて概略以下の様な内容での畜協阿蘇市所管内での地域内一貫生産システムの構築と新しい阿蘇あか牛産直システムの開発に向けて環境省の助成事業にも申請し、具体化が進められつつあるところです。

又、将来的にはあか牛肉直売所の開設についても具体化を検討していきたいと考えています。

## 畜協阿蘇支所管内での地域内一貫生産システムの構築と新しいあか牛産直システムの開発について

現在、検討を進めている新しいあか牛産直システムは概略以下のような内容です。

「阿蘇生まれ阿蘇育ち、阿蘇を丸ごと味わって」を基本コンセプトに、阿蘇市内の繁殖農家及び肥育農家と連携し、国産飼料を中心にした肥育方式で育てたあか牛を一頭丸買い方式で購入し、完全予約方式で注文を受け、冷蔵（フレッシュ）でお届けする（予定）システム。



まずは今年 12 月にある程度限定した方達にテスト供給としてお届けし、その反応や問題点を把握した上で、来春（4 月以降）からの本格展開を準備する。

又、商品には草原再生協議会のロゴマークを使用し、売り上げの一部を募金に役立てようと計画しています。

### 3. その他

今回の調査では、阿蘇あか牛畜産の振興へ向けたいくつかの新たな試みや世界文化遺産登録へ向けた動きなども明らかになってきており、今後はこうした取組みとも連携していく必要があると思われま

注) 地域内一貫生産とは

管内（地域内）の繁殖農家が子牛を生産し、管内（地域内）の肥育農家がその子牛を購入・肥育し、肥育牛の枝肉成績を繁殖農家へフィードバックするもので、管内繁殖雌牛の改良を迅速・確実に進め、産地づくりの基礎となる。

## 草小積みセミナー～草がつなぐ阿蘇の営み～ 開催報告

（木部直美：草小積み再生プロジェクト事務局／（公財）阿蘇グリーンストック）

### 1. はじめに

「草小積み（くさこづみ）」って、聞いたことがありますか？ 昭和 40 年代ころまで、秋の草原にずらりと並ぶ草小積みは阿蘇の風物詩でした。今ではほとんど見られなくなったものの、草小積みには後世に伝えたい知恵や工夫がぎっしり詰まっています。今年 1 月、その一端を紹介するセミナーを阿蘇地域世界農業遺産の事業として開催しましたので、概要をご報告します。

### 2. 開催のようす

草小積みに関するセミナーは 2019 年に続き 2 回目。1 回目は阿蘇の自然や文化を紹介するガイドさんを対象としたものでしたが、今年は対象を一般に広げて「より多くの人に草小積みを知っていただく」ことを目的としました。講師は 1 回目と同様に阿蘇市の町古閑牧野組合長市原啓吉さん。草

小積み製作歴 50 年、今も草小積みを作っておられる数少ない畜産農家さんです。

1 月 29 日のセミナーには、来場者 17 名とリモート視聴者 8 名、計 25 名が参加。一般の方に加えてジオガイドや野焼き支援ボランティアの方、草小積み製作に関わる地元牧野組合の方、観光・教育関係



「干草と雲海」（大滝典雄先生撮影）



草小積みセミナーの様子

の方などでした。また、リモートでの開催は、阿蘇地域循環共生圏研究プロジェクト熊本大学研究グループの一員ヨハネス・ウィルヘルムさんにご協力いただき実現しました。

### 3. セミナー概要

セミナーは、計 1 時間 30 分を、以下の 3 つのセクションに分けて実施しました。

#### ①徹底解説！草小積み

ここでは草小積みまつわるいくつかのキーワードをとりあげ、市原組合長に解説いただきました。例えば、「秋分を過ぎたら…」というキーワード。これは、草小積みを製作する時期と関係があって、長年の経験から導き出された知恵が含まれています。他にもキーワード解説を通して阿蘇弁が学べるというおまけ付きでした。

#### ②草でつなく阿蘇の草原

かつて草原は牛馬の飼養だけでなく、堆肥や緑肥、屋根材としての草の利用など、阿蘇の人々の暮らしに欠かせないものでした。草原の草の多くが使われなくなった現在、草小積みの技や知恵の継承を通して草原と人とのつながりを再生し、新たな価値を生み出していく意味を考えました。あわせて、阿蘇地域内に地元牧野組合の協力で設置している草小積みを紹介しました。

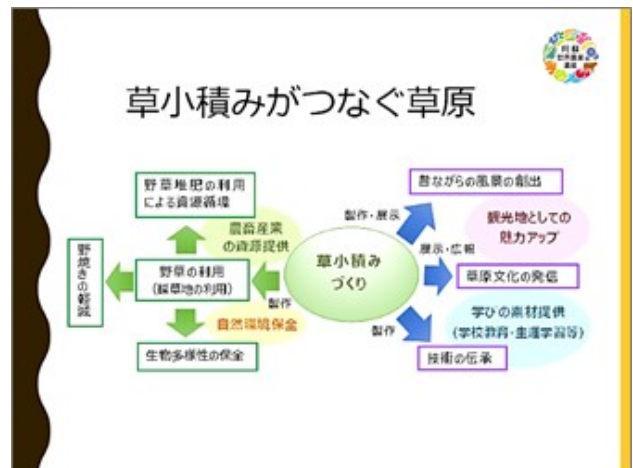
#### ③草小積みの作り方紹介

最後に、「タイムラプス」で撮影した草小積み製作パラパラ動画を用いて、製作手順やコツ、大切なポイントについて市原組合長に解説いただきました。



草小積みセミナーの様子

ビデオを用いた解説は今回初めての試みでしたが、会場からは「やはり実際に見てみないと良くわからない。草小積みの製作に参加できないか？」とうれしいご意見をいただき、干し草まみれの草小積み製作体験イベント開催という宿題ができました。



草小積みセミナーでの説明資料



#### 4. これからの展開

2016年より阿蘇地域世界農業遺産推進協会の事業としてスタートした「草小積み再生プロジェクト」は、阿蘇の草原に草小積みのある風景を再生し、人々の草原利用の知恵と工夫を引き継ごうという取り組みで、2020年度は牧野組合等のご協力をいただき阿蘇郡市内8カ所で計27基の草小積みを設置しました。在りし日に比べれば僅かではありますが、これからも草原と関わる人々の営みを絶やさずに、協力者の輪を広げていきたいと考えています。2021年度も3回目となるセミナーで引き続き「阿蘇の草小積み」をご紹介します予定です。そして、今秋の草小積み製作では阿蘇草原再生募金の助成をいただき35基を目指します！

◇草小積みセミナーのようすをニュース動画でどうぞ(約2分)  
→ YouTube チャンネル「WebTVアソ」



◇「草小積み再生プロジェクト」についてはこちらを！  
→ 阿蘇地域世界農業遺産HP：「草小積み」、ご存知ですか？



箱石峠の干草小積み (木部直美氏撮影)



干草小積み (大滝典雄氏撮影)



夕暮れの干草積み (大滝典雄氏撮影)



小積の輪地焼 (大滝典雄氏撮影)

## 草原をめぐる動き（2021年7月～2021年10月）

- 7/7 遊歩道の草刈り（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 7/7 霧ヶ谷湿原夏のいきもの観察会（場所：広島県山県郡北広島町千町原、連絡先：西中国山地自然史研究会）
- 7/24 夏のボランティアガイド（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）  
7/25, 7/31, 8/1, 8/7, 8/8 も開催
- 8/7 マルハナバチ調べ隊 2（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 8/21 野焼き支援ボランティア 初心者研修会（場所：熊本県阿蘇市 阿蘇草原保全活動センター「草原学習館」、連絡先：公益財団法人阿蘇グリーンストック）
- 9/4 マルハナバチ調べ隊 2（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 9/12 深入山の植物観察会（場所：広島県山県郡北広島町千町原、連絡先：西中国山地自然史研究会）
- 9/18 霧ヶ谷湿原の植物観察会（場所：広島県山県郡北広島町千町原、連絡先：西中国山地自然史研究会）
- 10/2-3 ミズナラ林の間伐と遊歩道整備（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）
- 10/2 自然観察交流会（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 10/30-31 上ノ原の茅刈り・茅刈検定（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）
- 10/30-11/7 上ノ原の茅刈りウイーク（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）
- 以下の行事は新型コロナウイルスの感染拡大により、中止となっています。
- 7/17-18 防火帯刈払い・遊歩道整備（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）
- ※予定が変更になる場合があります。上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

### 全国草原サミット・シンポジウム開催地 大募集！

全国草原の里市町村連絡協議会（自治体ネット）では、次回（第14回）全国草原サミット・シンポジウム開催地を募集しています。また、地元での開催を希望する方は、地元自治体への働きかけについても、ご協力をお願いいたします。

開催に興味・関心をお持ちでしたら、全国草原再生ネットワーク事務局まで、お気軽にお問い合わせ下さい。

### 全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 47 2021年7月号

一般社団法人全国草原再生ネットワーク事務局  
〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 378-14  
大田市ゲストハウス雪見院内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-86-8899

【編集後記】9月26日～27日に東伊豆町で開かれる全国草原サミット・シンポジウムは、東伊豆町の現地とオンラインとのハイブリッドでの開催が予定されています。各地での分科会が計画されるなど、新しいスタイルも模索され、より多くの方の参加が可能となる契機になるのではと期待しています。詳細が決まれば、メーリングリストなどでもお知らせします。